備陽史探訪の会4月例会資料

後鳥羽伝説紀行

高野町の王居峠神社

講師　備陽史探訪の会会長　田口義之

平成22年(2010)4月18日実施

びんご福山

備陽史探訪の会

予定表

◎午前7時40分　福山駅北口発

↓（国道2号線→国道184号線・途中トイレ休憩2回）

○同　9時40分　吉舎艮神社（三次市吉舎町吉舎・後鳥羽伝説地）

↓（国道184号線→県道61号線→国道432号線・比和でトイレ休憩）

○同　10時50分　王居峠神社（庄原市高野町湯川・後鳥羽伝説地）

↓

○同　11時20分　王貫峠（庄原市高野町・島根県仁多郡・後鳥羽伝説地）

↓

○午前11時40分　功徳寺（高野町新市・後鳥羽伝説地）

↓

○　正午　　円正寺（枝垂桜・昼食、トイレ）

徒歩（新市市街地散策・「後鳥羽伝説殺人事件」舞台）

○午後1時　　新市市街地発

↓

○午後1時15分　国重要文化財「堀江家住宅」（高野町中門田）

↓（国道432号線）

○同　2時　　古家真屋敷跡（高野町森脇、トイレ）

↓

○同　2時30分　国重要文化財「荒木家住宅」（　同　）

↓（国道432号線→県道61号線・途中灰塚ダムでトイレ休憩）

○同　3時30分　国重要文化財「旛山家住宅・市重要文化財木村家住宅

4時15分　同上発

↓（国道184号線・途中道の駅でトイレ休憩）

◎午後6時30分福山駅北口着・解散

※道路事情・天候等の影響で変更する事もあります。

後鳥羽伝説紀行

承久の乱後、幕府は後鳥羽上皇を隠岐国へ流した。

後鳥羽上皇通行のコースについて、幕府の公式記録ともいうべき『吾妻鏡』は、承久三年〔1221〕七月一三日御輿の前後を幕府の武士に囲まれて鳥羽の行宮（あんぐう）を出発した上皇の一行は、同月二七日出雲の大湊へ着、同港より隠岐へ向かい、八月五日隠岐国阿摩郡苅田郷に着とあり、また、京都方の記録に基づいて書かれた『承久兵乱記』にも、京都から播磨国の明石の浦へ出て、美作国と伯耆（ほうき）国の境を越えて出雲大湊へ着いたとしていて、備後国を通過したとはしていない。 しかし、備後国南部尾道から、北部の高野町まで点々として後鳥羽上皇通行の伝説が濃厚に残っている。

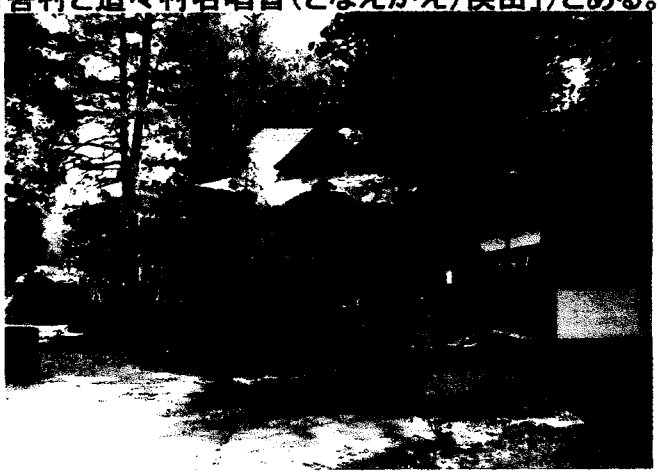
後鳥羽上皇配流ルート　（現国道184号線沿い）

宝暦10年（1760）の『長井浦記』には、後鳥羽上皇が隠岐国で詠まれた歌として、

「　隠岐の国たく火の里にたかぬ火を　備後の木梨にいまぞたくろう　」

をあげている（「たくろう」とは三原地方で海上に火の燃えるような現象をよんだ語で、不知火〈しらぬひ〉のこと）。上皇が尾道あたりの上陸され、陸路出雲へ向かわれたことを暗示している。

後鳥羽上皇の隠岐国配流のコースに関して、わが備後には古くから多くの伝説がある。すなわち、配流の途中、吉舎（三次市吉舎町）の艮神社（当時は少し南にあった）で一泊と伝え、吉舎の地名についても「国郡志御用に付吉舎村書上帳」に、「御叡慮（えいりょ）ニ相叶（かない）候や、吉（よ）き舎（やど）りと宣言在（あ）らせられ侯。それより吉舎村と追々村名唱替（となえかえ）侯由」）とある。



吉舎艮神社

同書は、艮神社宝蔵に収めている額は、後鳥羽上皇御宸筆（しんぴつ）の勅額であると述べている（この「丑艮大明神」と書かれた木製の額は、明治9年〔1876〕8月、県庁の命により宝物検査のため広島市の県庁に提出していたところ、同年12月の県庁火災のため焼失してしまった）。

旧境内近傍の勝田（かつた）池についても、夜蛙の鳴き声がやかましかったので、

「　蛙なく勝田の池の夕涼み　ただ目さますは松風の音　」

と詠まれたといい、『国郡志御用に付安田村書上帳』には、吉舎の名所、登美志（とみし）山をご覧になっての歌として、

「　皆人のふじと知られて備後なる　富士（とみし）の山の峰の白雲　」

をあげている（「しらでみば富士とやいわん備後なる　登美志〈とみし〉の山にかかる白雲」と詠まれたとする書もある）。

また、国道184号線沿いでは　世羅郡世羅町田打（とうち）には上皇行在（あんざい）の地と伝える「行在」の地名が残り、上皇が宿泊されたと伝えている。

上皇は、今の三良坂町で県道61号線沿いにルートをとられたようで、三良坂町では、洪水で同町仁賀（にか）で上下川が渡られないため、

「　われこそはわたりゆくべき川水も　心あらばやかわきだにせよ　」

と詠ぜられたといい（『三良坂町誌』）、渡河した地点を皇渡（おうわた）り、休息した所を仮屋迫（かりやざこ）、そこから山の尾根づたいの道を皇宇根（おううね）と言うという。村名もそれまでの二荷（にか）村を改めて仁賀村と称するようになったという（『国郡志御用に付仁賀村書上帳』）。

三良坂町から庄原市に入ると、後鳥羽上皇が泊まったと伝える「黒木（くろき）の御所」が庄原市本郷町にあり、同所に後鳥羽上皇勧請と伝える諏訪神社がある。さらに本郷町から山を越えた同市濁川（にごりかわ）町にも同様の大内神社がある。

庄原市高野町に入ると特に伝説が濃厚に残り、比和町森脇から高野町上湯川へ越す御所地（ごしょち）山に王居峠（おいだお）があり、同町和南原（わなんばら）から中国山地を越えて島根県仁多郡仁多町へ越す王貫峠（おうぬきだお）も上皇通過にちなむ地名で、岡大内の天皇社は後鳥羽上皇を祭り、新市の功徳寺（くどくじ）には半年も滞在して「ここも皇居にてありしといふ。堂の作り他にたがいて殊勝なり」（『芸藩通志』）とし、御宸筆の「万歳院」の額をはじめ後鳥羽上皇愛用と伝える

硯などの品々が残っている。また、同所で蔀(しとみ)山を詠まれた歌に、

「　蔀(しとみ)山降ろす嵐のはげしくて　紅葉の錦きぬ人もなし　」

というのがある。

王居峠神社

旧称王居峠荒神社、創立年代は不詳。元は王居峠荒神社と呼んでいたが、明治4年(1871)王居峠社と改め、更に現在の社名に改めて現在に至っている。伝承によると、承久3年(1221)後鳥羽法皇が隠岐配流の途中、しばらくここに駕をとめさせられた故事により、スサノオの尊を勧請して「王居峠神社」として祀ったことが起源と言う。現在、神社の付近を「御所地山」と呼び、前面一帯を「御所」の沖と呼ぶ。社叢は昭和55年に町(現在は市)の天然記念物に指定された。

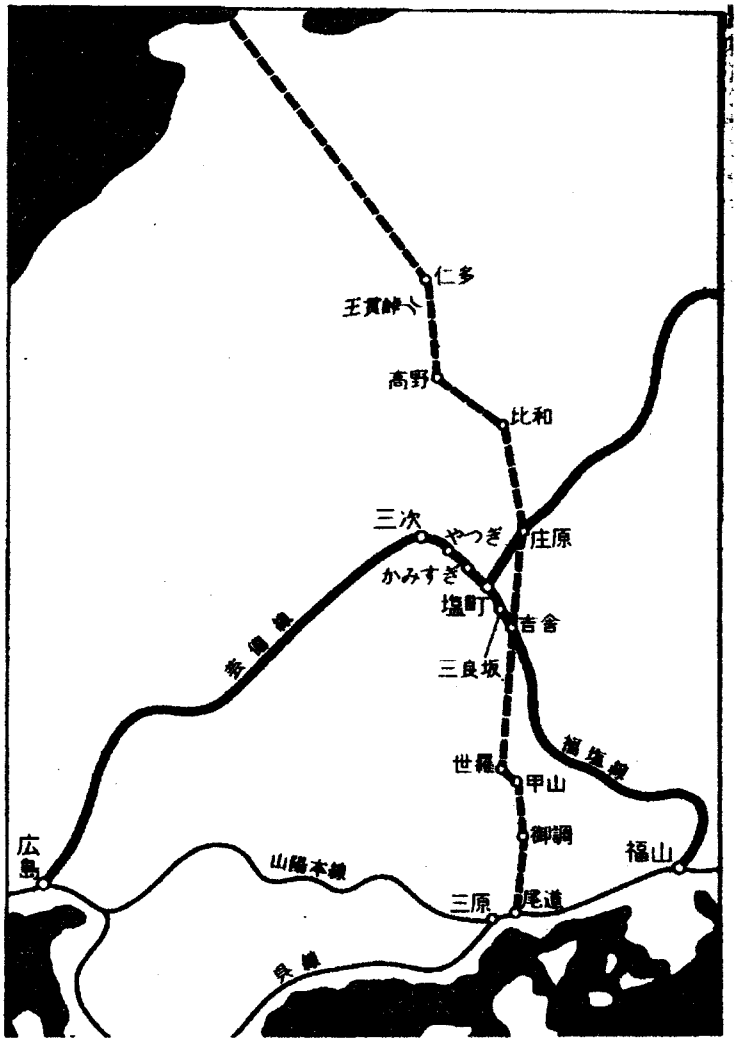
曹洞宗万歳院千秋山功徳寺　　(高野町大字新市1113)

弘仁元年(810)弘法大師御巡錫の折、当地で白鶴と緑亀が大師の側で鳴く不思議に遇われ、この地こそ仏法の最適の地とお考えになり、聖観音仏を刻み本尊となし、亀甲峰に亀甲峰舞鶴林寿無量裡園を建立したのが濫觴と伝える。
承久3年(1221)後鳥羽上皇が承久の乱に敗れ隠岐に配流される途中、9月から翌年3月まで行在所とされたと伝え、その時詠まれた御製が
　蔀山おろすあらしのはげしくて　もみじのにしき　きぬひともなし
である。後鳥羽法皇は当寺に「萬歳院」の院号とその勅額、硯、御衣などを下賜されたと伝え、今も寺宝となっている。その後、山内通資が臨済宗に改宗。更に蔀山城主多賀山氏によって現在地に移転され、備中洞松寺の茂林芝繁大和尚を中興開基として曹洞宗功徳寺として現在に至っている。

現本堂

伝多賀山通続墓

後鳥羽上皇が史実のルートを通って隠岐の島に御遷幸になったのか、はたまた伝説のルートを通って隠岐に渡られたのかは、今となっては不明である。だが、備後の我々が通った国道184号線、県道61号線、国道432号線沿いには、多くの伝説が残り、伝説の実在を信じている人がいるのは紛れも無い事実である。



伝説の後鳥羽上皇遷幸ルート（内田康夫「後鳥羽伝説殺人事件」角川文庫より）

内田康夫「後鳥羽伝説殺人事件」

(昭和57年単行本で発表された。現在は角川文庫版で刊行)

あらすじ

8年前、卒業論文の執筆のため、後鳥羽法皇が隠岐に流された道順を追って旅行していた女性、正法寺美也子は土砂崩れにあい、友人である浅見祐子と自らの記憶とを失ってしまった。彼女は友人の冥福を祈り、失われた記憶を取り戻すために旅行をしていたが、ある古本屋で自分の記憶に関わる一冊の書物を見つける。しかし、その日の午後、広島県のJR三次駅構内で、彼女は遺体となって発見された。野上刑事は、正法寺美也子を目撃していた富永隆夫が殺害されたことを知ると、彼女のことを知るために東京へ出張。彼はそこで浅見祐子の兄、浅見光彦と出会う。野上と光彦は美也子たちが辿った後鳥羽伝説のルートを歩き、犯人を追い詰めていく。そして、遂に高野町の旅館で重要な手がかりを発見する。
内田の人気小説「浅見光彦シリーズ」の出発点となった記念すべき作品である。

登場人物

正法寺 美也子(しょうほうじ みやこ)
この事件における第一の犠牲者。8年前、大学の卒論執筆のために友人・浅見祐子と旅行をしていたが、島根県仁多町で土砂崩れにあい、祐子は死亡、自分も記憶喪失となる。8年前と逆のコースを辿って、仁多町から尾道までを旅していたが、最終日の尾道にて、古本屋で「芸備地方風土記の研究(緑色の本)」を購入し、旅の中間地点であった三次市に戻るという不可解な行動を取る。彼女の行動なくしてはこの連続殺人事件はありえなかったという重要な位置に立つ人物。

浅見 祐子(あさみ ゆうこ)
美也子の友人であり、浅見光彦の妹。8年前、島根県で土砂崩れに遭い死亡。遺体に性行為の痕跡が認められた。

浅見 光彦(あさみ みつひこ)
この物語における主人公。ルポライターで、祐子の兄。広島県警の野上刑事に協力し、連続殺人事件と妹の死の真相を追い求める。活躍するのは、主に物語の中盤からで、最初は登場予定ではなかった。作者・内田康夫の思い付きからの登場で、この発想が無ければ、浅見光彦シリーズは無かったと言ってもいい。

富永 隆夫(とみなが たかお)
D-社の会社員。美也子が「緑色の本」を福塩線の列車内で手にしているのを目撃

した人物。庄原市で殺害される。

新祖(しんそ)
三次駅の駅員、第一発見者

池田 謙二(いけだ けんじ)
三次高校の歴史教諭。8年前、美也子達が泊まっていた民宿で、一緒に停まっていた「3人組」の一人で、8年前の事件に深く関与。自殺に見せかけて絞殺される。

木藤 孝一(きとう こういち)
庄原市の木藤製材所の二代目社長。「3人組」の一人。「3人組」の最後の一人(すなわち犯人である)と連絡を取り合っていた。口封じのため殺害される。

野上(のがみ)
三次警察署の叩き上げ刑事。この物語におけるもう一人の主人公。周りからは、ベテランで信頼のおける警察官として見られている。

桐山 道夫(きりやま みちお)
広島県警本部から来たエリート警部。榊原とは大学の同窓。殺人事件の捜査主任を務めることになった。野上刑事に対して、非協力的な態度を取る。

逸話

作家に専念する前の内田がCM制作会社を経営していたとき、広島県府中市のリョービの本社を度々訪れて広告の仕事を手がけた。この時、現在の会長で当時社長だった浦上浩から、この地方(備後地方)に伝わる後鳥羽天皇に纏わる伝承を聞いた。それを素に創作したのが、商業デビュー作である本作である。この作品は浅見光彦が初登場する内田の出世作となった。内田は、作中の光彦同様にソアラで取材旅行をすることや、取材中に会った人物の名前を登場人物の名前に使用する事などが知られている。浦上はこの前作である『本因坊殺人事件』の主人公の名前に使われている。

円正寺のシダレザクラ （県天然記念物）　（高野町新市）

円正寺の石段を上りきった所にある鐘楼の両側にシダレザクラが1本ずつ生じている。江戸時代初期に植えられたと伝えられる老木で、県天然記念物に指定されている。胸高幹囲はともに3．2メートル内外であるが、樹高は東側の方が大きい。4月中～下旬、帯紅白色の美しい花が咲く。

シダレザクラは、エドヒガンの枝の垂れた園芸品種で、野生のものは知られていない。全国各地に幹囲3メートルを超える木が報告されているが、そのような大木は特に関東以北に多い。「糸桜」とも呼ばれ、平安時代末期より歴史に登場し、桃山時代以後は絵画に多く描かれるようになった。

広島県内には、県天然記念物のシダレザクラがもう1件、広島市佐伯区五日市町石内にある。しかしその大きさはかなり劣り、胸高幹囲は2．6メートルである。

堀江家住宅　（国重要文化財）　（高野町中門田）

日本家屋の平面は、土間・床上が各半分という基本的な形のもとに、三間取り（広間型）、そして馴染（なじ）み深い四間取り（田の字型）平面へという流れを持つと考えられており、堀江家は三間取りの祖型をたどれる遺構として価値ある民家である。その創建年についてはつまびらかでないが、16世紀末とも17世紀初めともいう。いずれにしろ、古い農家の形態をよく伝えている民家の1つであることには変わりない。昭和44年（1969）から2年間にわたり、堀江家住宅の解体修理が行われたが、それによると上屋梁や奥の下屋の痕跡などから、江戸時代中期に大幅な改築を行ったものと思われる。とはいえ、主要な構造は創建当初の姿をよくとどめており、上屋柱には曲材を用い土間に立ち、胴差（どうさし）で柱間をつなぐという古い手法を残している。土間に立ち小屋組みを見上げると、素朴な荒々しさを感じる。柱間隔にしても畳寸法によっておらず、このことは近世初期の一般農家では畳を用いず、板敷か藁（わら）敷であった生活を想像させる。土間は広くとられ内厩（うまや）を持ち、冬期の厳しさを思わせる。軒が深く重厚な感じの歴史をしのばせる民家である。

堀江家住宅外観

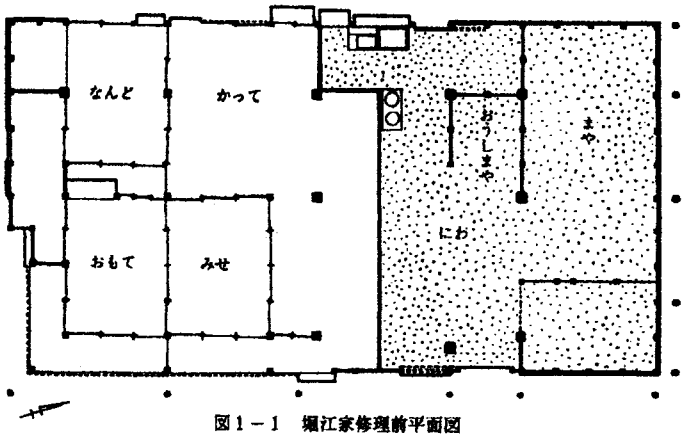


図1－1　堀江家修理前平面図

堀江家住宅図面

古家真屋敷跡　（庄原市史跡）　　（庄原市比和町森脇）

近世、鉄山師として権勢を振るった名越氏（屋号古家真）の屋敷跡である。名越氏は森脇村錦山城主森脇氏の流れを汲み、近世から近代にかけてたたら製鉄全盛の時代、付近一帯の「元締め」として財を蓄えた。現在吾妻山に残る「池」は同氏が「かんながし」用に築いたと伝わる。
現在残る石垣などは幕末期の築造と考えられ、「山止め」「水の手」「大手」などの精緻な石垣は、近世城郭の石垣技術に通ずるものがあり、名越家の権勢振りを今に伝えている。

奥の石垣が「山止め」である

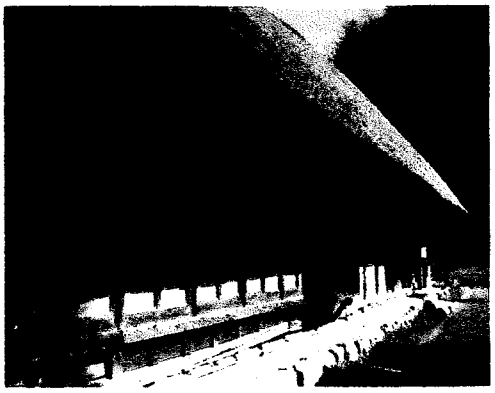
正面の左右に設けられた櫓台

荒木家住宅 （国重要文化財）　　（庄原市比和町森脇）

隣接する高野町の堀江家住宅と同様の広間をもつ、三間取り平面の住宅である。この住宅の創建年についてもつまびらかでないが、床上部の上屋柱は細みであり、整形しているところから、堀江家住宅よりやや下がる17世紀末から18世紀初めにかけての建築かと推定される。

座敷の柱間隔は規則的であり、畳寸法に合わせ建具を用いることをあらかじめ想定している造りとなっている。「なんど」隅の上屋柱は抜かれており、全体として堀江家住宅より整った造りになっている。広間の「なんど」側奥に一間余四方の室があった痕跡を残している。これは堀江家住宅にも、ほぼ同じ場所に見られるもので、この地方では「あだなんど」といっている。その「あだなんど」は、日本家屋の三間取り（広間型）から四間取り（田の字型）平面への発展過程を示す遺構として、興味深く見られている。

ただ、荒木家は永禄3年（1560）に大和国から現在地へ土着し、以後代々神官としての務めを果たしており、座敷と納戸境に「高間」と称する神座を設けているところは、堀江家住宅と異なるところである。



荒木家住宅の外観

近くの永昌寺境内に残る錦山城主
森脇豊前守元定の墓石

旛山家住宅 （国重要文化財）　　（三次市三良坂町のぞみが丘）

1978年（昭和53年）1月21日指定

旛山家住宅の建築年代を示す明確な資料は残っていないが、建築手法から十八世紀中頃、江戸時代中期の建築と考えられる。

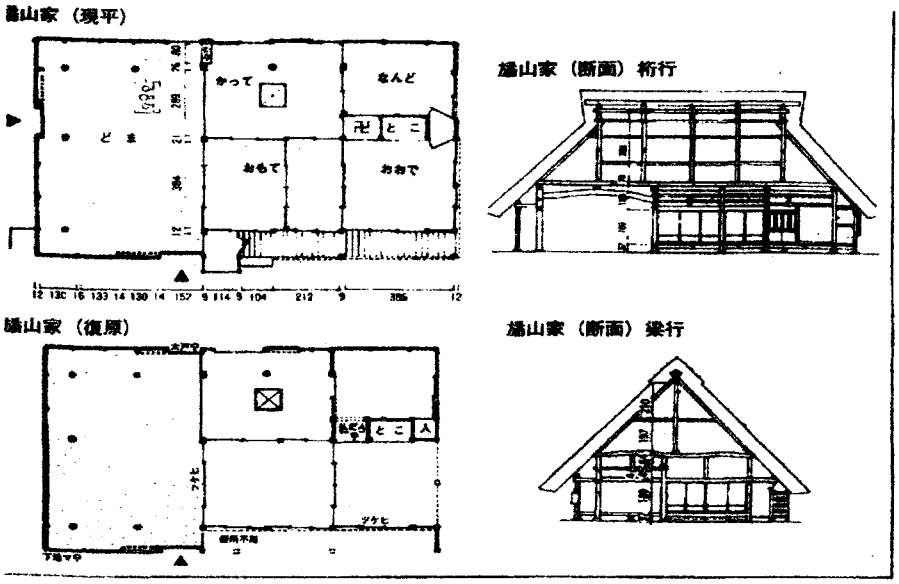
建物は南面して建ち、整形四間取りの平面で、西寄りにかなり広い土間を持ち、床上部は表側に「オモテ」「オオデ」が並び、「オオデ」には床（とこ）を設け、下屋（げや）部分に縁が張られています。裏側には「カッテ」「ナンド」が並んでいる。

構造は、梁間三間半、桁行六間半の上屋（じょうや）が石据えの柱で形作られ、周りに半間の下屋を廻し、屋根を葺き下ろした形式で、下屋庇外壁は真壁になっている。

この家の特徴は、年代は十八世紀中頃と考えられるのに対して、基本的な架構は、相当古風なものを残していることである。特に「カッテ」にかけて上屋柱が立ち並ぶ様は、なかなか見応えがある。

改造は比較的少なく、三良坂町大字灰塚湯谷に建築されていたものだが、三良坂町灰塚地域が灰塚ダムにより水没するため、1997年度（平成9年）から1998（平成10年）の二ヵ年を要して文化庁の指導のもと、解体移築工事に伴う調査を行い、当初の姿と、その後の変遷がほぼ明らかとなり、移築工事を機に灰塚ダム生活再建地「のぞみが丘」内へ、住宅建設当時の姿に復原・整備したものである。

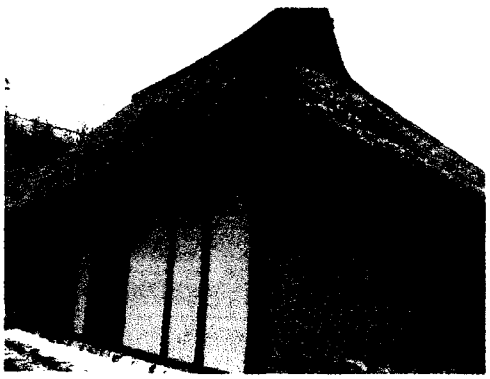
旛山家住宅外観



旗山家住宅図面

木村家住宅　（市重要文化財）　（三良坂町のぞみが丘）

この住宅は19世紀初頭の建築と見られる。母屋の現状は、ウチニワ、オモテ、デイ、ナンド、ダイドコロの部屋を配している。
木村家は、江戸時代末期に発達した農家の様相を良く伝えており、三良坂町における民家の発達過程を把握し、また、農家の変化を知る上で格好の資料と言える。
木村家住宅は、三良坂町大字大谷に建築されたものであるが、三良坂町灰塚地域に建築予定の灰塚ダムによって水没するため、1997年度に国土庁のふるさとC&Cモデル事業により移設したものである（三次市教育委員会設置の説明版）。



木村家住宅の外観と内部

吉舎艮神社に残る享保銘の絵馬

備陽史探訪の会

〒720－0824
広島県福山市多治米町5—19—8（田口義之方）
電話・ファクス（084）953－6157
Eメール b-tan-kai@009191.com